さざなみ国語教室
第456号　2020年3月25日
発行者代表　吉永幸司
連絡先　大津市柳川2-11-5
℡ 077-522-1008
発行所　滋賀児童文化協会
NPO 現代の教育問題研究所

自分を変えることから

安岡　寛

アンガーマネジメントをご存じだろうか。一九七〇年代にアメリカで始まったとされる「自分の怒りとうまくつき合う」ための感情コントロール法である。昨年度は約二四万人がアンガーマネジメント関係の研修を受講しているとのデータがあり、日本でも少しずつ広がりをみせている。

アンガーマネジメントをテーマに講演会や研修会で話をするようになって二年になる。

「すぐにイライラしてしまう自分を変えたい。」という思いを抱きながら、私の話に耳を傾ける子育て世代の保護者さんに対し、教職員をはじめとする子どもとかかわる仕事に携わる方は、「すぐにキレるクラスの子どもを変えたい。」という思いで話を聞いてくださることが多い。

自分の怒りをキレるという形でしか表現できない子どもたち。目に余る暴言。そして、悪くなる一方のクラスの雰囲気……。

自分がめざす学級経営の理想像と現実とのギャップが大きくなればなるほど、「目の前にいる子どもを何とかしたい」という思いが強くなるのはもっともなことである。

しかしながら、子どもを変えることは、なかなか難しい。「手を変え品を変え、いろいろなアプローチを試みるがうまく機能しない」という悩みを抱える教師は少なくない。

そこで、アンガーマネジメントの手法を使って、「子どもを変える」のではなく、「自分が変わる」ことを始めてみてはどうだろうか。

アンガーマネジメントでは、怒りの原因を、他人でも出来事でもなく、〈自分の中にある「べき」〉と、とらえている。

宿題のノートは開いて出すべき。

筆箱には鉛筆を五本入れるべき。

給食は、担任に言ってから食缶に返すべき。

こうした「べき」は、教師それぞれが、これまでの経験則から「こうすればうまくいく」というものであり、「自分にとっては正しいこと」なのである。

しかし、学級内にある教師の「べき」を守らない子どもをその都度叱ることは、教師には力が要ると同時に、子どもにとってはしんどいことでもある。

教師の「べき」が強ければ強いほど、子どもは不適切な行動をとることで自分のしんどさをアピールするという悪循環に陥る学級を多く見てきた。

自分の「べき」を子どもに押しつけていないかを振り返ってみる。

自分の持つ「べき」の整理整頓を行えば、怒るべきことに対して、怒る必要のないことの存在が見えてくる。

怒るべきことは怒り、怒る必要のないことは怒らない。

これが自分を変える第一歩だと思う。明日から、来週から、新学期から、「自分が変われば、子どもも変わっていくこと」を信じて、第一歩を踏み出すのもよいのではないだろうか。

（アンガーマネジメント
ファシリテーター・
栗東市立治田小学校）

さざなみ

▼学習指導要領改訂の要点に学習内容の改善・充実がある。読むことにおいては、学習過程を整理し「思考力・判断力・表現力」の各領域で明確にし「構造と内容の把握・精査と解釈・考えの形成・共有」としている。文学的な文章においては、場面、様子、人物、行動、変化、性格、全体像を「具体的に想像する」と示している。「想像する」という当たり前にも見えることを言葉を資質・能力と結びつけるとその意味は重くなる。▼国語学力と想像を結びつけて考える時、名前が浮かぶのは灘高国語教師・橋本武先生。スローリーディングをされた先生。授業では、明治期の書かれた中島勘助の『銀の匙』を３年かけて一言一句、丁寧に読むという指導をされた。「銀の匙研究ノート」という副教材には、通読・主題・短文の練習等の言葉が並ぶ。加えて学習方法が示されている。例えば、鑑賞では「文の書き出しのうまいと思われる部分を書き写すといい。そして、どんなところに感心させられたのか考えてみる」というように▼想像について、スローリーディングの面からいえは、具体的な学習方法を教える事であろうと考えられる。たとえば、情景を頭の中で絵にするということ。あるいは、想像ができる語を多方面から探す等。いずれにしても文に密着するということだろうか。

（吉永幸司）

さざなみ国語教室のホームページ　http://www.eonet.ne.jp/~sazanamikokugo
NPO 法人 現代の教育問題研究所のホームページ　http://kokugo-npo.com/index.html　ご覧ください。

学年末の取り組みが

北島　雅晴

三月初め、前任校で担任した女の子から手紙が届きました。

◇私は、二月の終わりにある卒業発表会でする劇の台本を友達と一生懸命書きました。今年の卒業発表会は、今までの狂言や落語ではなく、自分たちのクラスで話し合って決めることになりました。劇の題名は、「十三年後の同窓会」です。同窓会で六年生の思い出をふり返り、その様子を演じます。また各場面で、家族への感謝を伝えます。でも、コロナウィルスの影響で中止となり、大変悲しい思いをしました。私も担任の先生も泣きました。　※手紙の概略

この女の子は、三年生の時に担任しました。係活動では「げき係」をつくり、学級のみんなにだけでなく、一・二年生にも手作りの劇を披露しました。どんなことにも自分から進んで取り組む女の子でした。この三年間で、自分のよさを伸ばしてきたことを嬉しく感じるとともに、この子の輝く場が実現しなかったことを非常に残念に思いました。

現在私が担任している二年生でも、同じような経験をしました。「自分はっけんはっぴょう会」を三月中旬に行う予定でしたが、中止になりました。自分たちの成長した姿をおうちの人にみてもらうために、どんなことをしたいのかを話し合いました。その結果、○この一年間の出来事を劇にする。

○今まで歌ってきた歌をきいてもらう。

○楽器の演奏をする。

といった内容で行うことになりました。国語科、生活科、音楽科の学習を合わせたような大々的な学習となりました。

劇では、まず台本づくりに挑戦することにしました。二年生の「書くこと」の学習で、今までに台本づくりに取り組んだことが一度もなかったので、私自身も新鮮に感じました。

C音楽で、鍵盤ハーモニカがうまくできない子を助ける劇にしよう。

C「小ぐまの二月」の曲で劇をしたらどうかな。

C私、先生役をしたい。

といったように、グループで話し合い、げきの構想を練り、台本を作っていきました。

台本が出来上がったら、読み合わせ（台本の音読練習）をします。数回読み合わせを行うと、自分のせりふは、ほぼ覚えてしまいました。これから、台本を見ないで、動作をつけて練習するという段階で、発表会の中止、そして休校になりました。

六年生の卒業発表会中止ほどではないとしても、二年生の子どもたちの残念な思いは同じです。

（草津市立笠縫東小学校）

物語の「特色」をとらえる

北川　雅士

今年度一年間、読み解く力の推進委員として、様々な場所で研修に参加し、学んできた。その読み解く力の伝達講習会を兼ねた公開授業を２月１３日に行った。教材は『わらぐつの中の神様』（光村図書　五年銀河）５年生では『なまえつけてよ』の学習で人物相互の関係の変化を『大造じいさんとガン』の学習ですぐれた表現について学習を重ねてきた。本教材では『わらぐつの中の神様』の物語を読み、物語の「特色」を友だちに伝える力を身につけ、杉みき子さんの物語から選んだ一冊でも特色が伝えられるように学習を進めていった。

導入では教科書を読みながら、『特色』とは何かという部分を全員で確認した。特色とは「他のものと目立って違っている箇所。他のものと比べて優れている点」だということからまず、初発の感想を「今まで読んできた物語と違ったところは何か」という視点で書いて交流した。すると『物語の途中から新しい物語が始まる』『会話文の中になまりがある』『最後におばあちゃんとおじいちゃんの話につながる』『神様という言葉が出てくる』などの感想が見られた。そこで、これらの「他の作品と違うところ」にどのような良さがあるのかということを課題にして教科書の手引きを参考に学習を進めた。

各グループと個人に教科書の全文を打ち出したものを配り、自分たちの選んだ課題に応じて根拠となる文に線を引きながら学習を進めた。学習を進めていくと初発の感想で感じた他の作品と違うなと感じたところが教科書の手引きの言葉を使いながら次のように整理できた。

『物語の途中から新しい物語が始まる』→物語の構成による効果

『会話文の中になまりがある』→方言を用いる効果

『神様という言葉が出てくる』→題名、表現の効果

『わらぐつの中の神様』のまとめでは、「物語の特色紹介カード」に自分が感じた物語の特色をまとめた。また、並行読書を行った杉みき子さんの作品でも同様に「物語の特色紹介カード」に作品の特色をまとめ、交流した。この際に必ず物語の叙述を根拠に特色を伝えるようにまとめた。

今回の学習で、子ども達は物語のおもしろさを『特色』という言葉でより具体的に話そうという意識が見えてきた。学習後も物語を読んで読書ノートに記録する際には特色を書くようにして継続した取組を続けている。しかし、一方で課題も見えてきた。

今年度は、この実践のように交流メインの授業形態をとってきた。しかし、このような場合一人読みの力であったり、家庭学習で個人の課題を把握してくる習慣をつけておくことが不可欠になる。国語科だけでなく、各教科での日ごろの学習習慣の積み上げも積み上げの大切さを感じた１年間だった。

（彦根市立城南小学校）

「近江の子ども俳句教室」

西條　陽之

二月二日、大津市生涯学習センターにて、「近江の子ども俳句教室」がNPO法人現代の教育問題研究所の主催で開催され、スタッフとして参加させていただいた。

開会行事を終え、センター前の花壇の観察をしている時、好光先生は「自然とお友だちになる一番大切な方法は名前を覚えることです。」と子どもたちに話されていた。新しい春を前に、色とりどりに咲く花々を五感で感じることに加えて、知識として、あるいは語彙としてその花の名前を知るということの重要性を感じた瞬間であった。

存在や現象を認知するということは、語彙の指導においても重要な視点ではないだろうか。「山よそおう」と聞いていつの季節か、想像できるだろうか。山々が赤黄色に着飾ったそんなおしゃれな季節だと知ったならば、「山よそおう」は自分の血肉となったと言えるだろう。自分の知識が完全でないことを知っているという「無知の知」は、ソクラテス哲学の基本であるが、知っているに越した事はない。子どもたちが、わからないから知りたい、表現したいから知りたいという好奇心を持てるか、知らないからできない、わからないという諦めの境地に立つか、教師としての指導力が試される局面だ。

自然散策を終えて、季語についてのゲームを行った後、子どもたちは作品づくりを始めた。やはり、子どもたちの吸収力や感性には毎回驚かされる。今日初めて知った言葉も見事にアウトプットしながら素晴らしい句を次から次へと生み出していく。スタッフは、添削（とは言っても、技術的な指導はほとんどなく、良い点を見つけて褒めていく）の巡回をしていく。大きな花丸をもらって嬉しそうな表情が印象的であった。また、俳句づくりを通して子どもたちと保護者の方が語り合う姿がなんとも素晴らしかった。忙しなく過ぎる現代社会の中で、ふと足を止めて季節の喜びを見つけることは、豊かな情操を育むためにも大切な時間なのだと思う。

（大津市立小野小学校）

学級経営で大切にしたこと

川端　由紀

三学期から三年生の担任を急遽任され、一月から再び毎日教壇に立つことになりました。毎日児童と触れ合える喜びと共に、三学期という時期からの担任交代だったので、クラスを上手く立て直すことが果たしてできるのかずっと、不安でした。

私が学級を作る上で大切にしようと思ったことは、二つありました。

一つ目が、話を聞く子どもを育てることです。当初授業の初めの挨拶の時も姿勢が崩れている児童多かったので、そこから指導をしました。そして、私が話をしても、友達とずっと話している児童も何人かいたので、「先生は今何言った？」と唐突に質問をして、話を聞かなければ絶対に困るという状態を作っていきました。こうして一月当初、話す時私語が多かったクラスが、三月には、「話します」と一言言うと、一斉に私の方を向いて話を聞く姿勢を取るようになりました。また、並行して行ったのは、授業中、児童の発言を教師が繰り返さないという事です。児童の声が小さく、聞こえにくい場合、以前は「〇〇ということだよね？」と繰り返し発言し、全体が理解できるように仕向けていたのですが、そうすると誰も発言している児童の方を向かないし、一生懸命聞こうとしません。発言する人は、みんなに聞こえるように、聞く人は、発言している人の方を見て全力で聞く。そうやって聞く力を身に着けてつけていきました。

二つ目は、掃除や当番の仕事など当たり前のことが出来る人をほめるということです。一月当初は、叱る事も多く、何となく児童も不安な顔つきの子が多かったのを覚えています。新学期から三日たった頃から当たり前の事を当たり前にできている児童を褒めようと思い直し、毎日褒めることを徹底しました。そうすると、体育の準備や、図工の版画の準備など、教師が何も言わなくても児童の方から「準備を手伝わせてほしい」と言ってくるようになったのです。また、これは、一・二学期にいわゆる問題児と言われていた児童に多く見られました。また、それ以外の児童も、目立たないけれども、図工の後片付けをやってくれていたり、牛乳パックを当番が畳むのを忘れていたら、代わりにやってあげたり、小さな努力があちこちで見られるようになりました。このような経過を経て、今までは多くあった生徒指導の問題もほとんどみられなくなりました。この2つの基本的な事を徹底することで、児童の心の中に「きちんとやれば認めてもらえる」「真面目に取り組む事はいいことだ」という思いが醸成されていったのではないかと思います。

「ありがとう」「すごいね」この言葉を伝えるだけで、人は変われるのだと改めて気づきました。これからも言葉を大事に、教育を施していきたいです。

（大津市立石山小学校）

近江の子ども俳句教室
～豊かな感性を子どもたちに～

好光　幹雄

▼大津市長賞（校名姓敬称略）
城跡の　ため池泳ぐ　はぐれ鴨
葵衣　中２年

▼草津市長賞
富士見の森　たんぽぽ見つけて
自まんする　優斗　小５年

▼大津市教育長賞
葉ぼたんが　太陽みたいに　開いてる
彩葉　小４年

▼草津市教育長賞
青い湖（うみ）　鴨がたくさん　泳いでる
政成　小３年

▼ＮＨＫ大津放送局長賞
チューリップ　あなたが咲く頃
碧子　小３年

▼びわ湖放送賞
すいせんの　においをかいで　はるきぶん
真央　幼稚園年中

▼朝日新聞社賞
春の風　膳所（ぜぜ）公園を　通る風
千絢　小１年

▼京都新聞賞
さざんかと　ゆらゆらゆれて　おどりたい
Ｆ・紫乃　幼稚園年長

▼中日新聞社賞
道の中　ひめつるそばと　おともだち
彩香　小２年

▼産経新聞社賞
ビーバーよ　一人でどこ行くの
さむくないの
琴椛　小２年

▼読売新聞大津支局長賞
水鳥が　すいすい泳ぐ　楽しそう
美咲　小１年

▼毎日新聞大津支局長賞
スイートピー　いいことばかり
花丸だ
奏　小２年

【俳句づくりの前に】

かつて、私がミヒャエル・エンデやペーター・ヘルトリングの作品の翻訳をされました上田真而子先生（ドイツ文学者）にお会いしてお話を伺っていたときに、今でも忘れられない貴重なお言葉を拝聴いたしました。「子どもを大切にするということは、子どもの〈初めて〉を大切にすることです。」同じようなことは、かつて講演会にお招きした三原透先生（滋賀大学教育学部附属特別支援学校設立メンバー）のお言葉にもあります。

子どもたちにとって、日々「新たに体験するということ」（人との出会いは勿論、初めて目にすること、耳にすること、味わうこと等など日常的な全てを含めて）は、その都度、一度切りです。長い人生の中で二度と「初めて」ということはないのです。取り返せないのです。例えば、初めて桜を見た時の感動。そして桜という言葉を知って、桜の体験が、桜の経験へと意味付けされ価値付けされたとき、「桜」の世界が子どもの心の中に豊かに花開きます。それはたとえ目の前の桜が散っても、永遠に子どもの心に残るのです。心の中に永遠に桜が咲き続けるのです。ですから「子どもの初めて」ということを、できるだけ大切にし、意味あるもの価値あるものとしたいと思うのです。そのために私たちは最大限の労力を惜しみません。学校教育の場は当然ですが、勿論そこだけが子どもの初めての世界なのではありません。家庭、地域、社会の中で、子どもたちは日々様々な「初めて」を体験します。今回のようにその体験を俳句に詠むということもその一つに過ぎません。

しかし、その一つ一つを大切にするということが、その積み重ねが、子どもの心の豊かさに繋がるのだとも思うのです。ですから、子どもたちの初めての「俳句」体験も大切にしたいと考えました。雪の日、雨の日、強風の日、快晴の日、幼稚園の子どもを思い、中学生を思い、沢山の指導案を考えて臨みました。

主催ＮＰＯ法人現代の教育問題研究所（理事長吉永幸司）
後援滋賀県・大津市・草津市
滋賀県教育委員会・大津市教育委員会・草津市教育委員会
ＮＨＫ大津放送局・ＫＢＳ京都
株式会社えふえむ草津・ＦＭ大津
ＢＢＣびわ湖放送・中日新聞社
朝日新聞大津総局・産経新聞社
毎日新聞大津支局・京都新聞
読売新聞大津支局
草津俳句連盟（会長石倉政苑）

★三日月大造滋賀県知事様はじめ、ご後援をいただきました多くの皆様に厚く御礼申し上げます。また実行委員の先生方、本当にありがとうございました。全参加者72名で盛会に終わったのも、偏に皆様のお陰です。深謝。

季語知るや
子等きらきらと
花菜晴れ　幹雄
（さざなみ国語教室同人）

編集後記

▼二月例会（四五五回）は、川端由起先生（石山小学校）の五年生の書くことに関する授業の実践報告、「グラフや表を用いて書こう」でした。

▼自分の考えを文章で表現することに抵抗のある児童の実態から、三つの工夫を行ったものでした。

①考えを発信することに魅力を持てる課題設定の工夫
②説得力のある文章作成のために学び合う場の工夫
③教科書のグラフや表等の資料を用いたモデル作文を、自分が書くときに活用する学びのプロセスの丁寧な指導。

▼協議で話題になったことは次のようなことであった。

①資料の有無で文章の説得力が違うことに気づかせたい。
②読み手に分かりやすく伝えるための資料の選択の仕方や、それを読み解く視点を吟味させたい。
③書き手が自分の意見の正否・適不適や効果をもう一度見直す時には、個別的に関わり支援や指導はきめ細やかに行いたい。
④論理的な文章を書く指導のカリキュラム（紹介文・説明文・報告・解説文・意見論説文・推薦文など）の見通しと学年の重点を把握しておくことが大切だ。

▼同人の北島さんからは自費制作の「永井隆物語」の紹介をしていただいた。意欲的な同人の活動に学びたいものだと出席者一同の感想である。

▼巻頭には、安岡寛先生から、玉稿をいただきました。深謝。
（森　邦博）